

奏であう人

音がつむぐ地域の心



にし はま ひで き
西濱 秀樹さん(山形市)

1971年大阪府生まれ。公益財団法人関西フィルハーモニー管弦楽団において、楽団の法人化と経営の安定化に貢献。その後、請われて2015年より公益社団法人山形交響楽協会専務理事兼事務局長に就任。オーケストラの企画・運営を行いながら、音楽と地域社会との関わりについて考え続けている。



山形交響楽団の創立以来、半世紀以上続くスクールコンサートでは、これまでに延べ300万人の子どもたちがオーケストラの生の音に触れている。西濱さんは、子どもたちが記憶に残るようわかりやすく曲の解説を行っている。



ふじ あら ゆき
藤原 雪さん(東京都)

1988年山形市生まれ。幼少期から無形文化財である上山藩鼓笛楽隊に参加。篠笛奏者として演奏活動を行うとともに、近年は女性初の隊長として、鼓笛楽隊の活動拡大に取り組んでいる。鼓笛楽隊として、令和元年の天皇陛下御即位奉祝行事での奉奏や、昨年行われた大阪・関西万博で演奏を披露した。



江戸時代から続く、地域に根ざした音の文化である上山藩鼓笛楽隊。現在は月に数回上山に戻り藤原さんが指導的な立場として関わり、次代を担う子どもたちの育成に取り組んでいる。

音楽との出会いが、今の自分に続いている

「音楽との初めての出会いは、2歳の時でした」藤原さんは、穏やかに話し始めます。上山市の祭りで耳にした約380年前から続く、鼓笛楽隊の調べ。その音は、家族や親戚、そして地域で共有する、特別な思い出となっていきました。

「幼いながらもその時感じた多幸感が、今でも心の奥にあります。その体験が音楽家として活動する、今の自分につながっているのだと思います」。

音楽はなにか特別なものではなく、日常の延長にあるものだったと藤原さんはいいます。誰かに教えられたわけでも、意識していたわけでもない。それでも、確かに残っている感覚が、今の演奏活動の原点になっていると話します。

一方、西濱さんが話すのは、音楽を聴く側としての体験です。

「若い頃、オーケストラの演奏を聴き、感動で動けなくなってしまうことがあります」。その経験が、

演奏者ではない立場でオーケストラに関わる道を選ぶ、大きなきっかけになったと話す西濱さん。

「生で聴いた音楽は、人の心に強く残り、行動のきっかけにもなり得ると思います。それ以来、音楽で、オーケストラで、世の中を変えられたいのではないかと考えるようになりました」。

子どもたちと共有する、かけがえのない体験

お二人が共通して話したのは、子どもたちと音楽が出会う場面についてでした。

「スクールコンサートで、子どもたちが初めてオーケストラの音を聴いた時の表情は、何度見ても印象的です」。西濱さんはそう話し、「幼少期に本物の音を聴いたという経験は、聴く機会に恵まれなかった場合に比べて、はるかに成長の糧になるのではないのでしょうか」と続けます。藤原さんも鼓笛楽隊の活動を通して、長く子どもたちと向き合ってきました。

「同じ曲をみんなで演奏して、『で

きた!』という感覚を一緒に味わう。その時間を重ねる過程で、音楽が子どもたちの間で自然に共有されていくのを感じます」。

その経験が、すぐに何かの形になるわけではないかもしれない。それでも、いつか実を結ぶ日が来るのだろうと、日々の活動の中で感じていると言います。

「その場で理解できなくてもいいのです」と西濱さん。「大人になってから、ふと音を思い出す。その経験自体が、十分に意味を持っていると思います」。

音楽が持つ力、音楽がつなぐ未来

「音楽はすぐに結果を与えてくれるものではありませんが、人の内側に静かに積み重なっていくものだと信じています」と話す西濱さん。藤原さんは「言葉や世代を越え、人の心に届くものだと思います」と応え、「同じ時間を共有した感覚が残る。それが、音楽の持つ力なのかと思います」と続けます。

音楽で山形と向き合ってきたお二

人は、この地域への思いについても話します。「私たちは、いつの間にか自分たち自身の評価を見誤っていないでしょうか。日本人には物事をカテゴリー化して当てはめようとする傾向があるといわれます。それは、山形県民にもいえることで、発信が苦手、目立つのは得意ではないといった観念を自分たちに当てはめ、挑戦しない理由を先に用意してはいないでしょうか。固定観念や人の評価に流されず、自分の感性で好き嫌いを自由に判断し、そして新しい挑戦を応援する姿勢でいてほしい。意識を少しずつ変えていければ、この街はもっと夢を描けるはずですよ」。

近年、不寛容になりつつある社会の中で、人と人をつなぐのが、音楽の力。これからの社会を担い、文化の土壌を作っていく子どもたちが、日常的に良い音楽と触れ合える環境を整えること。その積み重ねが、私たち県民一人ひとりの意識を、少しずつ変えていく力になるはず。とも話すお二人。そこには、山形のこれからの考えるヒントがあるように感じられました。